まえがき

この本は，私が 41 年間英語を教えてきた経験から生まれました。私は教養部（九州大学教養部），教養学部（東京大学教養学部）で教鞭をとってきたので，主に英語，いわゆる「一般教養英語」を教えることが多かったからです。英語を教えながら，また，東大では同時に学部の講義科目で「英語生態論」と題して英語について教え，それがその後目白大学で「英語学」や「応用言語学」というような名称の講義科目になりました。そのようにいろいろな形で英語に接し，教えながら強く感じたことを振り返り，今回，『英語を学ぶ楽しみ―国際コミュニケーションのために―』として 16 章にまとめるに至りました。

教えながら特に強く感じたことは，学生にとって英語は数学や理科と同じような教科の 1 つでしかなく，英語が身近なものではなく，ことばとして生きていないということでした。そのことへの反省から，本書では文法をこえて，実際に使われている英語に接し，英語を生きたことばとして身近に感じてもられればと思います。

私はもともと「英語教育学」を専攻し，東京大学の大学院では英語教育学と応用言語学（バイリンガリズム研究）を教えてきました。しかし，本書は専門書でも英語教育のハウツーものでもなく，英語を学ぶ楽しみとそこから得られる豊かさに焦点を当てています。単なる知識として文法を学ぶのではなく，ことばが生きていることを体験しながら英語を学ぶことによって，それを取り巻く文化や歴史に接し，さらに社会の仕組みや人間の心理にも理解が深まっていきます。それと同時に，英語の多様性を学ぶことにより国際舞台でのコミュニケーションや異文化に対する洞察が深まり，グローバルな人材の育成に貢献するのではないかと自負しています。外国語として英語を学ぶことを通して教養を深め，思考力を磨くだけでなく，さらに全人的な成長の育成に貢献するというのが本書の目指すところです。

ですから，対象は英語および英語学習に関心をもっている人すべてになります。一般教養書として読んでいただければ幸いです。中でもとりわけ，英語を学ぶ大学生にはぜひ読んでもらいたいと思います。英語の学習

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

はただスキルの問題だけではなく，その背後にある豊かな文化や社会に接することを通して視野が広がり，一層英語への関心が増し，学習意欲につながることが期待できます。また，先生方には，英語を教えたり英語について研究するさまざまな授業で，テキストまたは参考書としても使っていただけるのではないかと思います。

私が生きた英語に興味を持ったのは，1967 年，大学 4 年生で初めてイギリスに行った時です。それまで教室で習うだけだった英語が実際に生きて使われ，すぐ身の周りで飛び交っていたのです。それまで習ってきたこととは違うことにいくつも遭遇しました。eight の発音が［áit］だったり，often が［ɔ́ftn］だったり，また文法でも「紅茶 2 杯」が two teas であったり，“Some more tea?” と尋ねられると，「あれっ，疑問文なのに some はおかしいのでは？」と思ったりしました。でも，恥ずかしながら，始めの頃はあまり話せなかったし，講義ノートも “It is important that . . .” までで，その後の肝心な部分が書き取れていませんでした。

とにかく，若い頃の留学に端を発し，その後オーストリア人と結婚し，2 人の共通語としては英語を使いました。子どもが生まれると，子育てはことばの問題だけではなく，文化の伝承を含むので，それぞれの母語が一番自然だろうということからドイツ語と日本語で 2 人の娘を育てました。つまり，その当時，我が家には 3 つの言語が飛び交っていたのです。それは，次の図のような形で，相手によって使い分けがなされていました。その当時，我が家に来た人は，「変な家族だねー！」なんて言っていました。

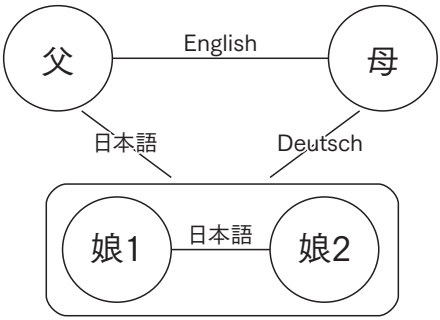


図 1：我が家の言語政策

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

目　次

第 1 章　コミュニケーションとは……1
第 2 章　文法をこえて……5
第 3 章　世界の言語事情：世界は多言語……13
第 4 章　世界の言語事情：人々は複言語……21
第 5 章　英語は世界のリンガ・フランカ……31
第 6 章　英語の地域的変異：方言……39
第 7 章　英語の歴史……47
第 8 章　最近の英語……53
第 9 章　社会的変異：階級による違い……59
第 10 章　社会的変異：デパートで……65
第 11 章　場面による使い分け：丁寧さ……71
第 12 章　性差（ジェンダー）……81
第 13 章　英語の生態：語用論……87
第 14 章　会話の原則：前提と含意，Turn-taking など……95
第 15 章　異文化コミュニケーション……101
第 16 章　異文化理解：Culture shock……119

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第１章
コミュニケーションとは

英語の学習との関係で，「コミュニケーション」というフレーズがはやりことばになっています。例えば，「英語を習うのは何のため？」と尋ねると，ほとんどの人が「コミュニケーションのため」と答えるでしょう。その時の「コミュニケーション」は，たいていが日常会話を指しています。いわゆる挨拶や道案内です。しかし，コミュニケーションにはそれ以外にも難しい専門的な内容について討議することもあるし，ビジネスで相手の出方をうかがいながら複雑な交渉をすることもあるでしょう。また，最近のメールのやり取りに代表されるように，文字によるコミュニケーションもあります。さらには，別にことばに出して言うわけではないけれど，私たちはものごとを考える時，頭の中でことばを使って考えています。これを「内言」と言います。「えーと，次，何すればいいのかな？」と独り言のような場合もあるし，「この本はちょっと面白そうだな」と思ったりする場合もあります。

コミュニケーションは「意思伝達」と訳されます。意思を伝達するのは，ことばだけではありません。典型的なのがジェスチャーです。ジェスチャー・ゲームで，身振り手振りで何なのか当てっこをしたことがあるでしょう。その極にあるのがパントマイムの芸です。チャップリンの無声映画を見れば，さすがと納得できます。

顔の表情も意思を伝達する手段としてひと役買います。嬉しい顔，悲しい顔，怒った顔など，多彩な気持ちを伝えます。その逆が，いわゆる「ポーカー・フェイス」で，嬉しさや悲しさを表情に出しません。トランプのポーカー（poker）から来ていて，気持ちを正直に顔に出したりしたら負けて

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

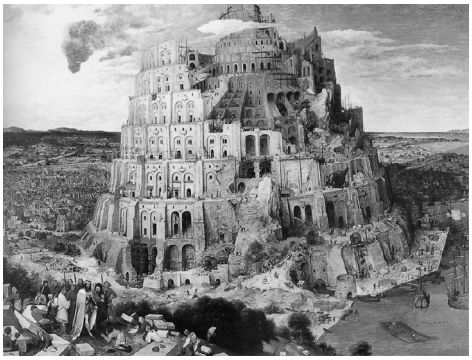
第２章
文法をこえて

ことばによるコミュニケーションにおいて，第１章で述べた準言語の部分が非常に重要になります。言語自体が表す文字通りの意味を覆すからです。いわゆる「文法」ではこの文字通りの意味しか導き出せません。この準言語の要素がその文字通りの意味を否定して，別の意味合いをもたせるのです。「含蓄」とか「ニュアンス」と呼ばれるものにあたります。例えば，部屋に入り暑くてたまらない時に「暑いですね」と言ったら，間接的には「クーラーをつけてください」ということがほのめかされています。直接言ったのでは角が立つので，それを和らげて遠回しに言うのが大人の会話です。子どもは「トイレ！」のように直截ににぶっきらぼうに言いますが，大人になるとその辺はオブラートをかけて表現するのが礼儀です。普通の場合，話し手の意図は聞き手に正しく理解され，「それではクーラーをつけましょう」という反応につながり，コミュニケーションは成功したことになります。

英語の対話練習で，“Do you have a pen?”→“Yes, I do./No, I don’t.” というような練習をしますが，これはあくまでも文法練習（do という代動詞の使い方）であって，実際のコミュニケーションではそれではピンボケになってしまいます。普通の会話の場合，相手が期待しているのは，“Yes, here you are.” か “Sorry, I don’t.” というような反応になります。同じことが，食事中に “Can you pass me the salt?” と言った場合，文法的には can は能力を表す助動詞なので，“Yes, I can.” と言ってそり返っていたのでは相手が気を悪くします。これは能力を尋ねているわけではなく，依頼なのです。そのような文の持つ文法的な意味をこえて，発話の持つ本

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第３章
世界の言語事情：世界は多言語


ブリューゲル『バベルの塔』

世界の言語というような話題になると，西洋文化では『旧約聖書』の「創世記」を連想します。つまり，人間が神と等しくなろうとして天に届くような高い塔を建てようとしたのですが，その人間の傲慢さが神の怒りに触れて，人間のことばが混乱させられました。そのようにして人間社会の言語は多様になった，と聖書は説明します。このことを絵画に描いたのが，あの有名なブリューゲルの「バベルの塔」です。

世界には約 200 の国々があります。それに対して，世界の言語の数はどれ位でしょうか。それが，驚くことに 5,000 とも 6,000 とも言われています（Crystal 2010）。これらの数値から何がわかるでしょうか。言語の数を国の数で割り算すれば明らかなように，世界的には，１つの国に複数の言語が存在するという「多言語」（multilingual）状況が当たり前だということです。そしてそこに住む人々は，当然ながら複数の言語を操る「複言語」（plurilingual）な話者になります。

言語との関連でさらに驚かされるのは，識字率です。つまり，世界には文字の読み書きができない人が非常に多いという点です。日本では識字率

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 4 章
世界の言語事情：世界の人々は複言語

前章では世界の多言語事情をみてきましたが，そのような多言語社会で生活している人々の言語使用はどのようになっているのでしょうか。第 3 章でも述べたように，世界的には 1 つの国でもいくつかの言語が話され，多言語（multilingual）状況があたり前です。そして，そこに住む人々は必然的に複言語（plurilingual）になります。「複言語」は必ずしも両方の言語をネイティブのように話す必要はありません。しっかりした母語に加えて，必要に応じて使えるもう 1 つの言語を持っていれば良いのです。とりわけ，グローバル化された今日の世界では人の行き来も激しく，情報の伝達も凄まじいものがあり，その必要性は高まるばかりです。日本人でも，最近，バイリンガルと呼ばれる人たちが増えてきています。1970 年代，日本企業が海外に進出した時には帰国子女が急増し，彼らのことばの問題，特に帰国後の英語の維持と日本語の問題が大きく社会問題としてクローズアップされました。現在では，海外留学だけでなく，日本国内でもバイリンガル教育や英語によるイマージョン・プログラムが広がり，英語が使える日本人は少なくありません。ビジネスで英語を使う人も増え，ユニクロや楽天など英語を公用語とする会社も現れました。

人がバイリンガルになるのは多言語社会で生活している場合だけでなく，両親が異言語話者の場合，家の内と外との言語が違う場合など，いろいろなパターンがあります。また，ことばの違う社会に移住してバイリンガルになるケースもあります。典型的には，明治時代に日本からアメリカに移民した人たちです。1 世は日本語中心で英語は必要最小限レベルですが，2 世になると家では日本語，外では英語のバイリンガル生活になり，

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章
英語は世界のリンガ・フランカ

前の2つの章では，世界の多言語事情について社会的な側面と個人的な側面から検討してきましたが，この章では，その中にあってひとり勝ち状態である英語に焦点を当て，その実情を見ていきたいと思います。

世界には5〜6千の言語があると言いましたが，それらは平等な地位にあるのではありません。特に驚くべき点は，話者が百万人以上いる言語は250，全体の4%でしかないのに，この4%を世界人口の96%の人が使っているのです。さらには，世界の言語のトップ10で世界人口の半分がカバーされてしまいます（Crystal 2010）。他方，少数民族言語は危機的状況にあります。家庭でも学校でも大言語が侵食し，次の世代には大言語に移行してしまうのです。話者数を単純に比較すると中国語がトップですが，その広がりから見ると英語の方が上回ります。

英語がこれ程までに広がってきた背景には，大英帝国の歴史と政治・経済力があります。17世紀にイギリスが海外に進出し，世界中に植民地を作り，陽の沈まぬ大英帝国を打ち立てたことに起因します。植民地政策とは，まず自国の言語を押しつけ，政治・経済を支配することです。1600年の東インド会社設立，1607年のヴァージニア植民地建設に始まり，17世紀中に北米（アメリカ，カリブ海のジャマイカ，ドミニカなど）へ，18世紀になるとアジア（インド，香港，マレーシア，シンガポール）へ，19世紀にはアフリカ（ガーナ，ナイジェリア，ケニア，南アフリカ）へと進出して行きました。その結果，英語が世界中に広がったのです。これらの元植民地の国々では，今も英語が共通語として用いられています。母語としてではなく，第二言語としてですが。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 6 章
英語の地域的変異：方言

前章のカチルの図を覚えていますね。その「内円」で示された英語を母語とする国々だけを見ても，アメリカ英語とイギリス英語，さらにオーストラリア英語などの違いがあるだけでなく，イギリス，アメリカ国内にも地域的な違いが見られます。発音面の訛りであったり，方言による語彙の違いであったりします。また，「外円」に分類される ESL の国々の場合，発音や表現が土着化してしまい，インド英語のような強い訛り（典型的には［θ］が［t］）が見られ，シンガポールでは Singlish と呼ばれるような中国語からの特徴的な表現（例えば，英語の付加疑問 “～, isn’t it?” に該当する文末の -la）が一般化しています。さらに，拡大円の EFL の国々になると，さまざまな母語からの影響でその特徴もさまざまです。しかし，それでもなお国際コミュニケーションは成立しているのです。とりわけ最近は，国際コミュニケーションの 70% がノンネイティブ・スピーカー同士間で行われているという実態があります。まさに，ELF，国際共通語としての英語ですね。

前章で少し触れましたが，いわゆる「標準語」とされているのが，イギリスでは RP※と呼ばれる容認発音です。一般的には BBC のアナウンサーの話す英語，オックスフォード大学で話される英語という意味で，BBC English とも Oxford English とも呼ばれています。それに対して，アメリカの標準語は中西部で話される General American と呼ばれるものになります。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 7 章
英語の歴史

英語の多様性に関して，前章では地域的な変異を見てきましたが，ここでは通時的な変異を扱います。前者を横軸とすれば，ここで扱う歴史は縦軸になります。つまり，歴史的に英語がどのように変わってきたのかに焦点を当てます。

紀元前から大ブリテン島（イギリス本土のこと）にはケルト人が住みケルト語を話していました。4 世紀末にゲルマン大移動が始まり，現在のドイツ北部からアングル，サクソン，ジュート族が侵略し，ケルト人をアイルランドやスコットランドに追いやりました。アングロ・サクソンによって話されていた言語 Angles に由来して “English” と呼ばれるようになりました。

イギリスの歴史の中で英語に大きな影響を与えた出来事は，1066 年のノルマン征服（Norman Conquest）です。フランス語を話すノルマンディー公ウィリアムが英国の王位を継承し，それに続いて多くのノルマン人が移住して来ました。その結果，その後 200 年間はフランス語が社会的，文化的に優位を占め，英語は一般庶民のことばに留まりました。この結果，フランス語から入ってきた語彙は驚くべき数に上ります。

英語史では，700–1150 年は古英語（Old English）の時代とされます。その後，中英語（Middle English）の 1150–1500 年がこの時期に当たり，フランス語の影響は特に語彙面で顕著で，その数は 1 万語とも言われます。フランス語に由来する語彙は，現代英語の基本 1000 語では 1 割程度ですが，1 万語まで範囲を広げると 4 割を超えます。具体的にその例を挙げると次のようになります。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 8 章
最近の英語

前章では英語の歴史を見てきましたが，この章では，それとの関連で，最近の英語に焦点を当てたいと思います。最近，英語がどのように変化してきて，どのような特徴があるのかを探っていきます。

中でも一番顕著な点は，社会の変化が言語に反映されている点です。その意味において，ことばは社会の変化を映し出す鏡とも言えます。最近の社会のトレンドの大きな特徴は，伝統や形式など片苦しさから解放されて，社会全体がインフォーマル化し，カジュアル傾向にあることでしょう。それが一番よく現れているのは服装です。昔の大学では，教授は皆ダークスーツにネクタイが定番でした。それが今や T シャツ，G パンです。また，海外旅行の際，スーツ，ネクタイが普通でしたが，今やよほどのビジネスマンでない限りそんな堅苦しい格好で旅行したりしません。私の主観（と偏見）で言えることは，最近の特徴として，女性が強くなったこと，男性のひげが増えたこと，煙草を吸う人が減ったこと，などが一番目立つ点です。このような社会の変化がことばに反映され，くだけた表現が広まり，女性など弱い者に対する差別的なことばが否定されるようになったのです。男性のひげは，強くなった女性に対抗して，男性のマッチョ的主張とも考えられます。タバコに関しては，50–60 年代ハリウッド・スターたちが格好良く煙草を吸う姿が，ポスターなどで大写しされていました。それが，健康への配慮から喫煙は trendy でなくなってきました。私も大人になった証として 20 歳から吸い始め，イギリスは紙巻きたばこが高いからという理由でパイプにしましたが，その後アメリカに行くとどうも肩身が狭いのです。友人の家に滞在した時，食後に “May I smoke?” と

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 9 章
社会的変異：階級による違い

英語の多様性に関して，これまで地域的変異，歴史的変異を見てきました。それに加えて，次に 3 つ目の柱として社会的な変異に焦点を当てたいと思います。社会的変異では，社会的階級・階層による違いや場面・社会的脈絡（コンテキスト）による差異，さらに男女の性差（ジェンダー）の問題も考えてみたいと思います。このようなことばの変化（バリエーション）と社会的要因の関わりを明らかにし，そのメカニズムを探る学問が「社会言語学」です。

まず，この第 8 章では映画 *My Fair Lady*（1964）を扱います。これは，原作 B. Shaw: *Pygmalion*（1916）をもとに，貧しい下町娘エライザ（Eliza）が，言語学者ヒギンズ教授（Prof. Higgins）の指導で淑女となっていく姿を描いたミュージカルで，主役はオードリー・ヘップバーンとレックス・ハリソンです。

東宝・東和 昭和 49 年映画パンフレット

この映画で特に興味深いのは，イギリスの階級社会を映し出した英語の社会的変異，いわゆる「階級方言」です。ロンドンの下町で花を売る少女 Eliza は，East End の労働者階級の方言コックニー（Cockney）を話しますが，そのひどい訛った英語を聞いた上流階級出身の言語学者 Prof. Higgins（実在した言語学者の H. Sweet がモデル

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 10 章
社会的変異：デパートで

前章ではイギリスの身分制度にもとづいた英語の変異を見ましたが，ここでは，もう一つの社会的な側面を映し出したアメリカでの研究に焦点を当てます。このラボフの研究（Labov 1966）は，発音と階級差の関係について調査したものです。対象となったのは，ニューヨークで顧客の階層が異なる 3 つのデパート（高級店の Saks Fifth Avenue，中産階級向けの Macy's，庶民派のディスカウント店 S. Klein）の店員 264 名でした。

方法としては，母音の直後にくる［r］の有無を調べました。というのは，アメリカ英語では car［kɑ:*r*］の［r］のような post-vocalic［r］は威信形（格調の高い発音）とされているからです。具体的には，客を装った調査員が店員に次のような質問をして，その返答に post-vocalic［r］が出ているか，いないかに注目したのです。

客	：*Excuse me, where are the women's shoes?*
店員	：*Fourth floor.*
客	：*Excuse me?*
店員	：*Fourth floor.*（強調して）

表 4：Labov の調査

客を装った調査員は，女性の靴売り場が 4 階にあることを知っていながら，Fourth floor を言わせたかったのです。Fourth floor と 2 カ所 post-vocalic［r］が出てくる可能性があります。さらに，よく聞こえなかった振りをして "Excuse me?" と問い返すのです。当然，次の Fourth

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 11 章
場面による使い分け：丁寧さ

社会的変異の１つとして，日常の言語生活で重要になってくるのは，場面によることばの使い分けです。いわゆる TPO により場面や相手にふさわしいことば使いが求められます。文法的に正しくても，コンテキストから見て社会的に適切でないと誤解を生んだり，相手を傷つけたり，コミュニケーションに支障をきたすことになります。この意味において，生きた英語を考える上で非常に重要な視点になります。

日常的な例として，電話の応対を考えてみましょう。受話器を取り，まず「もしもし，オカですが」と返答します。大きく違ってくるのはその後です。相手が誰なのかわかった途端，「なんだ，お前か」となったり，「はい，かしこまりました」というように，ことば使いが 180 度変わります。「くだけた表現」から「かしこまった表現」までいろいろな可能性がある中から，相手によって社会的に最も適切と思われることば使いを瞬時に選んでいるのです。

私たちは，コミュニケーションの起こる状況（「正式な場面」から「くだけた場面」），および対人的要因（社会的な上下関係や親密度）によって文体を選択し，形式さ（formality）や丁寧さ（politeness）を調節します。とりわけ，タテ社会である日本文化においては重要で，日本語では相手に対する敬意に加えて，自分を謙譲するという形で敬語が複雑に機能しています。ただ，丁寧さを表そうと「お」をつければいいという問題ではなく，単語そのものがそっくり変わってしまいます。「先生が…と言った／…へ行った」と言っても，一応文法的には正しく意味は伝わりますが，このような発言は社会性がまだ未発達の子どもの場合には許されても，大人

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 12 章
性差（ジェンダー）

これまで社会的階層による違い，場面による使い分けなどをみてきましたが，社会的変異にはその他，性差（ジェンダー）による違い，民族による違い（黒人英語，特に Ebonics と呼ばれるアフリカ系アメリカ人の英語），年代による違い（語尾のイントネーションを上げて話す uptalk と呼ばれる若者ことば）など，いろいろな多様性があります。ここではそのうちの性差を扱うに留めたいと思います。

最近の英語の特徴として，差別を嫌う PC の流れに触れました（第 2 章）。Chairman が chairperson/chair に変わり，teacher を受ける代名詞は he/she になりました。そのような男女平等の流れの中でも，依然として男女の違いは認められます。日本語ではとりわけ男女差が大きいことで知られています。川端康成の『雪国』の出だしの部分で，陽子が「駅長さん，私です。ご機嫌よろしゅうございます。」と言っているのを見ると，すぐにこれは女性のことばだとわかります。それに対して，駅長さんが「ああ，陽子さんじゃないか。お帰りかい。また寒くなったよ。」と答えているのは，明らかに男性ことばです。サイデンステッカーの訳（1956）では，

> “How are you?” the girl called out. “It’s Yoko.”
> “Yoko, is it. On your way back? It’s gotten cold again.”

となっているだけで，英語でははっきりと男女の違いはわかりません。

そのような性差を実体験するために，次の英文の一節を日本語に訳して

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 13 章
英語の生態：語用論

第 2 章では「文法をこえて」と題して，コミュニケーションにおいてキネシックスや準言語が文法をも否定することを学び，続く章では英語に焦点を合わせ，地域的な多様性や社会的な変異や使い分けなどを見てきました。それらを通して，いかに英語が生きているのか，実際にどのように使われているのか，理解が深まったことと思います。

本書ではこれまでの古い文法の「こうあるべきだ」という考え方（規範文法）をこえて，記述文法的なアプローチで実際に使われていることばに焦点を当て，生きた言語としてとらえます。そして，そのようなアプローチを「英語の生態論」と名付けたのです。その中で導き出された重要なポイントは，主に次の 3 点にまとめることができるでしょう。

- 準言語が文法をこえる。
- ことばの適切さは場面によって変わる。
- コミュニケーションの目的は意図の伝達と理解である。

このような考え方は「語用論」（pragmatics）と重なります。語用論とは，「言語研究に話し手と聞き手，およびシチュエーション（場面，脈絡）を加え，話し手の意図と聞き手の解釈を中心に，表現の持つ意味合いを考察する分野」と定義されます。それに対して，従来の狭い文法研究は言語の仕組み（特に統語論）だけに集中し，コミュニケーションに関わる人間や場面を切り捨て，意味も命題的意味（文字通りの意味）のみで，含蓄や言外の意は含まないため，生きた英語の生態をとらえるには十分ではありません。実際の英語の使用 use を見ると，人のコミュニケーションは特

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 14 章
会話の原則：前提と含意，Turn-taking など

話しことばの一番の特徴として，キネシックスや準言語の占める割合が大きいということは第 1 章で述べました（メラビアンによれば，それぞれ 55%，38%）。それ以外にも，音声の果たす役割に非常に興味深い点がありました。例えば，同じ文でも音調によって意味が異なったり，文法が打ち消されたりするからです。典型的な例として，次のようなものをあげました。

- I beg your pardon?：上昇調では Could you say it again? だが，下降調では I'm awfully sorry. の意味合いになる。
- I can't do it now.：fall－rise のイントネーションによって，... maybe later という意味合いがほのめかされる。
- You are a college student?：形式的には平叙文の形をしているが，語尾を上げると疑問の意を表す。
- Put it on the table, not by the table.：書きことばの強調構文の働きを，文強勢で表す。

このような音調面での特徴に加えて，話しことばで大切になるのは言外の意を推測することと，意味的な一貫性をとることです。「言外の意」は，前提（presupposition）と含意（entailment）に区別されます。例えば，He remembered to post the letter. という文の場合，前提として He was expected to post the letter. があります。また，含意とはその発話から論

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 15 章
異文化コミュニケーション

第 5 章で，英語は世界のリンガ・フランカとして広く使われている一方，地域的な変異があることを述べました。それに加えて，忘れてならないのは，国際社会においてはコミュニケーションのやり方が一様ではなく，文化によって違う点です。異文化コミュニケーションにおける誤解は，異なる予測や期待をしていることから生じます。つまり，私たちが成長過程で身につけていくステレオタイプ（固定観念）とスクリプト（文化的行動様式）の結果と考えられます。とりわけ，グローバル化された現代社会においては，文化の違いを乗り越え，相互理解を達成することがますます重要になってきています。

日本で異文化の問題が注目されるようになったのは 1970 年代です。日本企業の海外進出が盛んになり，海外でのいろいろな文化摩擦を経験し，異文化適応の問題が大きく取り上げられるようになりました。ことばの問題だけでなく，日本という島国のやり方や考え方が海外の文化とうまくいかなかったからです。そして，その原因を求めて，『タテ社会の人間関係』（中根千枝）や『甘えの構造』（土居健郎）に代表されるように，日本人論が盛んになりました。

異文化を知る意義は，海外に関する表面的な知識の吸収だけでなく，日本では当たり前のことが当たり前でなくなり，逆に日本の文化を再認識，再評価するところにあります。いわゆる「井の中の蛙」的なぬるま湯状態から脱皮し，複眼的な視点を身につけるのです。海外に出るといろいろな違いに気づかされます。ヨーロッパの古いけれど綺麗な街並みを見ると，

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 16 章
異文化理解：Culture shock

異文化コミュニケーションが目指すところは，とりもなおさず言語や文化の違いを乗り越えて，異文化間の相互理解を達成することにあります。ところが，異文化に接するとこれまで慣れ親しんだものと違うため，その移行がスムーズにいかず，不適応が起こり，心理的な動揺をきたします。これが「カルチャー・ショック」（culture shock）と呼ばれるものになります。カルチャー・ショックは「異なった文化に接した時に，準備のない訪問者に対して与えられる影響」と定義されますが，それは時とともに変化し，徐々に新しい環境に慣れていきます。この異文化適応は acculturation（文化変容）と呼ばれます。「文化変容仮説」によれば，文化的に変容する度合いに対応して第二言語の習得も進んでいくとされています（Schumann 1978）。このことは海外に行った時ばかりでなく，日本国内でも起こります。地方から東京の大学に入った大学生を考えてみてください。東京での生活に慣れるに従って，徐々に地方訛りのことばから東京ことばに変わりますが，そのスピードには個人差があります。そのスピードに影響を与えるのは何でしょうか。文化変容仮説では，社会的要因と心理的要因によって説明しています。積極的に相手の社会に入っていくことにより社会的距離を縮め，早く同化しようとする前向きな態度により心理的距離を縮めると，第二言語習得にプラスに働くというわけです。

私が 1967 年に初めてイギリスに行った時カルチャー・ショックを強く感じた背景には，まだ日本とイギリスには文明的に大きな開きがあったからです。当時は 1 ポンド＝1000 円の時代で（今や 1 ポンド＝150 円前後），若い人たちは知らないでしょうが，日本の旧式なトイレや風呂で子ども時

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers